

出題のねらい

㊦は、現代文（論理的文章）の問題です。類人猿研究者である山極壽一氏の文章「負けない構えの美しさをゴリラから学ぶ」から出題しました。文章の前半部では、長らく続けてきた野生ニホンザルの調査からマウンテンゴリラの観察へと研究対象を展開していった頃の経験から、両者の形成する社会の違いを比較していきます。特にゴリラ社会の特徴とその長所に着眼し、人間社会のあり方へと筆者の主張は展開されていきます。人間社会の目指すべき方向性をゴリラから学ぶことができると説く筆者の視点と主張を的確に読み取れているかどうかを問う問題です。文体にも用語にも、深い専門性を必要とするものは見受けられません。具体的事例をあげながら繰り返される筆者の主張を、どれだけ読み取れるかが分かれ目になってくる問題です。

㊧は、源俊頼の著わした歌論書『俊頼髓脳』からの出題です。雨に関する用語について述べた一節からの出題です。複雑な構造ではなく、単純な説明文となっていますが、一つ一つの語句を丁寧に追うことができるか、また、基礎的知識を習得しているかが課題となります。



【解答】(50点)

問一	a 鉄則	b 無難	c 不思議	
	d 慎重	e 由来		(各2点×5)
問二	A エ	B ウ	C ア	D イ
				(各2点×4)
問三	① ウ	② ア	③ イ	(各2点×3)
問四	イ			(4点)
問五	ウ			(4点)
問六	ア			(4点)
問七	i 優劣関係	ii 対等		(各2点×2)
問八	勝つことで、自分が不利な状況に置かれることがあり、それを避けようとするため。			(6点)
問九	ウ			(4点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。全体的にはよくできていました。誤答としては、a「鉄則」を「徹」で書くもの、b「無難」を「不」で書くもの、d「慎」の字形を正確に書けないものが目立ちました。この設問に関しては、論理的文章によく見られる語彙や日常の報道文などでよく見かける語を中心に設問化しています。漢字学習を単なる知識の蓄積としてと

らえず、文章を読み解くキーワードを把握するものとしての学習もこころがけてください。

問二 語彙力（知識）、および文脈に合致する言葉を選び取る思考力・判断力をみる問題です。全体的によくできていました。空欄補充問題は、例年出題されているとおり、筆者の論旨の展開に関わる語を出題部分としました。この問題での設問選択肢は、「つまり」が副詞、残り三選択肢が接続詞です。接続詞は、文章相互の関係を整理し論旨の展開を明確にします。また、副詞が論理的文章で用いられる場合、筆者の意志や判断を表明しようとする文脈に現れることが多い傾向があります。とりわけ「つまり」は、考え方を最終的にまとめる際に用いられるため、その主張を読者に的確に伝えることを強く意識した箇所と言えます。空欄への正確な補充には、文章全体の構造の把握、前後の文の関係把握だけではなく、全体の論旨を踏まえた選択にこころがけてください。

問三 語彙力（知識）、および文脈に沿った言葉の意味を選び取る思考力・判断力をみる問題です。全体的によくできていました。③について、俗語的理解からか、エとする誤答が目立った程度です。

問四 脱文を選択肢から補充する問題で、思考力・判断力を測る問題です。全体的によく出来ていました。誤答として目立つのはエでしたが、次段落にある「どちらも負けようとは思っていない」がヒントになっています。

問五 文全体の導入部の読解が的確になされているかを選択肢形式ではかり、思考力・判断力をみる問題です。全体的によく出来ていました。導入部では、ニホンザルからマウンテンゴリラへと研究対象が変わって間もない頃の経験を語り、両者の形成する社会の違いに筆者が気づいていく過程が述べられています。そうした文脈の流れが読み取れているかどうかを問うています。

問六 筆者は、本文半ばで、ニホンザルとは異なるゴリラ独自の行動原理を分析しています。設問傍線部を含む一文は、そのゴリラへの観察体験を綴る文脈から彼等の社会のあり方に気がつく文脈へと転換する役割を担っています。こうした、文全体の流れの展開を読み取れているかどうかを選択肢形式で問い、思考力・判断力を測る問題です。全体的によく出来ていましたが、誤答の中ではウとするものが目立ちました。筆者が述べているのは「構え」のもたらす効果であり、その即時性ではないところがポイントです。

一般入試／国語(前期)

問七 本文後半部では、ゴリラ社会の観察を受けて、我々人間がその利点に学ぶ面があるとするれば、どのような社会を目指せるのか、という可能性が主張されます。そうした、文全体のまとめの論旨を読み取れているかどうかを本文中からの語句抜き出し形式で問い、思考力・判断力を測る問題です。後半部全体に広く目を配り筆者の主張を読み取ることがポイントです。iの正答率がやや低くなったのは、設問傍線部を含む段落のみの狭い範囲にこだわった誤答が多かったのが原因のようです。iiは、ほとんどが正答でした。

問八 同じく本文後半部の論旨を読み取る思考力・判断力、それを自分の言葉で適切に要約する表現力をみる問題です。全体的によく出来ていましたが、「勝つこと」による状況変化のみを述べていたり、出題文の一部をそのまま書き抜いただけの誤答が目立ちました。論旨を読み取り自らの言葉で要約することは、論理的文章を正確に理解するためには重要な作業です。日常的にも、文章に接する際の習慣として身につけておいてください。

問九 現代社会の問題点を指摘する文章を空欄補充形式で問い、思考力・判断力、そして論理的文章で頻繁に用いられる語彙の意味に関する知識を問う問題です。ほとんどの解答が正答でした。

㉓

【現代語訳】

春降る雨を「春さめ」と称する。夏期の雨ならば「ときの雨」と称すべきである。しかしながら、十月に降る雨を「時の雨」と書いて「しぐれ」と言うのである。「さみだれ」は「五月の雨」と書きあらわすので、五月に降る雨だけに称して、夏期でも四月・六月の雨には使わない。また六月には、「ゆふだち」と言って急に降る雨を別称する。「夕立」と書き表わす上は、夕暮に降らねばいけないのであろう。実際にも、その時分に降るようだ。秋すなわち七・八・九月に降る雨は、別の呼び名はない。ただし、秋なのに「しぐれ」を、このようにある人が表現した歌がある。

我がやどの……（我が家のそばの早稲を作る田ではまだ稲刈りが終わらないのに、こんなに早くから初時雨が降ってきてしまったことだ）

この歌の発想を推量すると、「まだき」と表現しているので、やはり冬の歌とは受けとれない。「時雨かな」という表現は、初冬十月の空が急に曇って、ひとしきり雨が強く降って間もなく晴れるという意味である。ちょうど初冬の時と同じ状態で降ったのであろうか。だから、時期は秋であるけれども、空模様が初冬の時雨が降る時

と同じ様子であったので、「初時雨かな」と詠んでしまった歌だと考えられる。しかしこの歌は、古今集には下句が異なって入集している。これはどのような事情なのであろうか。「みぞれ」という現象は、雪がまじって降ってくる雨のことを言うので、冬もしくは初春の季などに詠むべき歌語であらうか。「肘笠雨」というのは、突然に降る雨を表現すべき詞であらう。急なことで、笠も用意できない場合であって、やむを得ず衣の袖で自分の頭をおおうのである。おおう身にとっては、袖を通す肘で雨をさけている事になるので「肘笠雨」と言うのである。

妹がかど……（恋しく想う女の家の門が見える。あそこを通り過ぎにくくなるようにわか雨が降ってほしいものだ。それを口実にしてあの家に雨宿りしたいから）

【解答】(50点)

問一	a	ア	b	ウ	c	イ	(各2点×3)
問二	i	エ	ii	エ			(各2点×2)
問三	i	夕暮れに	ii	ウ	iii	エ	(各2点×3)
	iv	降るようだ					(4点)
問四	初						(2点)
問五	X	エ	Y	ウ			(各3点×2)
問六	i	門					(3点)
	ii	イ					(3点)
	iii	降ってほしい					(3点)
	iv	口実					(3点)
	v	彼女の家に入りたい(彼女に会いたい)					(4点)
問七	i	ウ	ii	紀貫之	iii	土佐日記(土左日記)	(各2点×3)

【解説】

問一 古文の語句の意味を問う問題です。毎年、基本語句の意味は出題されるのですから、問題集等での練習や暗記は、必須です。

特に、a「まだき」・b「とりあへぬ(とりあえず)」のような、現代語と形が似ていて意味の異なる語句には注意が必要です。c「かづく」も、「かつぐ」ではありません。どれも、現代語の意味に引かれた誤答(aウ bイ cア)が多く、基本語句の習得に心がけてください。

問二 本文を正確に理解する上で、助詞や助動詞の意味・用法を習得することは必須です。ここでは、「ぞかし」(係助詞「ぞ」+終助詞「かし」)が「文末に用いられ、強く判断したものにさらに念を押す

意を添える」ことを理解した上で、解釈することが必要です。

問三 本文内容を正確に理解しているかを問う問題です。副詞「さ」が指し示す内容は何か、助動詞「めり」の意味は何かを説明できることが求められます。傍線部分の前に、「夕立は夕暮れに降る」ことを説明しており、その後で「まことにも」(実際にも)と述べているので、「さ」は「夕暮れに」を指します。また、「めり」は伝聞・婉曲の意味を持つ助動詞ですが、夕立が夕方に降ることは、実際に知っていることですので、伝聞で「(夕立は夕方に)降るようだ」となるのはおかしいこととなります。つまり、ここでは知っているけれど、敢えてほかして述べるという婉曲で訳すことがふさわしいこととなります。そこで、「降るようだ」と訳します。こういった手続きで解釈することを怠って、「降るだろう」・「降ったのだ」といった誤答が多く、回答率は非常に低いものでした。また、係助詞「ぞ」に対応して文末が連体形になることは、古文の基本です。なので、iiiの解答は連体形となりますが、この誤答も多い点は残念でした。

問四 基本的な語句を問う問題です。日常生活の中でも「初雪」(はつゆき)等と表現します。

問五 空欄補充の問題です。内容を正確に読み取れているかを問う問題です。この歌が、「秋のしぐれ」に詠んだ歌(「秋のしぐれに、人の申す歌」)であると直前の本文に書いてあります。また、古文における季節では、10月～12月が冬です。本文1行目に10月の雨を時雨と言うことが書いてあるので、時雨とは、本来は冬を表す季語であるのに、秋の歌に用いていることをここでは説明しています。つまり、「まだき」が基本語句として「早くも」と訳すところから、この歌は、「秋だというのに、早くも(冬に降るはずの)しぐれの降った」ことを詠んだ歌となります。なので、空欄□Xは、その直前に「なお」が用いられていることから、「やはり～の歌とは思えない」と訳す箇所と考えられ、「冬」の歌ではないことが指摘されていることとなります。また、空欄□Yは、この歌の季節を述べている箇所なので、本文の説明(「秋のしぐれに、人の申す歌」)の通り、「秋」になります。非常に正答率の低い結果となりました。

問六 和歌の解釈、詠み手の心情を問う問題です。iは古文の基本語彙を問う問題です。「かど」という語が何を意味するかを問うていますが、意味としてだけでなく「門松(かどまつ)」・「門出(かどで)」

のように「門」を「かど」と読むことは現代語にもありますので、知っておくべきものです。誤答に、「角」とあるのはともかくも、「かど」とは読めない漢字の多いことも残念でした。

問七 文学史の基本的知識を問う問題です。勅撰集の撰者や各時代における代表的な文学作品とそのジャンルや作者を習得することは必須です。本学の入試問題においても文学史の出題される傾向にあること、また、これらの知識を身につけることを過去問題集や解説等でも指摘しています。それにも関わらず、正答率が低いことは非常に残念です。覚えておけば確実に得点の取れる問題を落すことは、当落に大きく関わることを自覚してください。

また、漢字の間違いとして、「紀貫之」の「之」字を「乏」字としたものが多々見られました。これは、この問題のことだけでなく、どの解答においても、正確に書く。(抜き出しを正しく行なう・誤字をしない)ことに注意を払ってください。